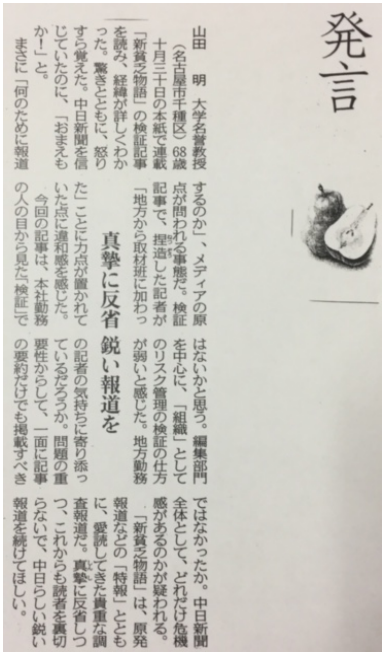
新貧乏物語

写真は6月刊行の中日新聞社会部編ルポルタージュ。「しのび寄る貧困の現場」という副題のように、困窮する人々への取材記録だ。

まえがきから―本書は2016年、ほぼ1年にわたって中日新聞、東京新聞、北陸中日新聞で掲載した長期連載「新貧乏物語」をベースに加筆・修正し、単行本化したものです。「驚くべきは現時の文明国における多数人の貧困である」で始まる河上肇の評論『貧乏物語』が1916(大正5)年に発表されてからちょうど百年の節目。貧困が決して過去のものではなく、私たちが生きる平成の現代においても社会を蝕む病巣であることをさまざまな現場から掘り起こし、その実態をストレートに伝えるのが狙いでした。無論、百年前と今とでは社会制度も生活環境も、人々の価値観も大きく異なります。モノや食糧が不足した戦前と比べれば、日本は格段に豊かになっているという反論もあるでしょう。ただ、河上が「金持ちが奢侈をやめることで富裕層と貧乏人の格差をなくす」と指摘した経済格差による相対的な貧困はなくなるどころか、むしろ増殖されていると言っても過言ではありません。‥‥

夫の介護で年金を取り崩す女性高齢者、職を奪われ生活苦にあえぐがん患者、親の都合で教育機会を奪われた子どもたち‥ 。本書で取り上げている困窮者のほとんどは特別な人たちではありません。まじめに人生を歩きながら、ほんのささいなつまずきや意図せぬ不幸から貧しい境遇を背負う羽目になりました。「板子一枚下は地獄」という諺ではありませんが、誰もが貧困と隣り合わせという危うさが格差社会の正体です。「自己責任」の名の下に貧困を放置すれば、それこそ安倍晋三首相の言う「一億総活躍社会」どころか「一億総貧困社会」になります。



発言

山田　明　大学名誉教授（名古屋市千種区）68歳

十月三十日の本紙で連載「新貧乏物語」の検証記事を読み、経緯が詳しくわかった。驚きとともに、怒りすら覚えた。中日新聞を信じていたのに、「おまえもか！」と。

まさに「何のために報道するのか」、メディアの原点が問われる事態だ。検証記事で、捏造した記者が「地方から取材班に加わった」ことに力点が置かれていた点に違和感を感じた。

今回の記事は、本社勤務の記者の気持ちに寄り添っているだろうか。問題の重要性からして、一面に記事の人の目から見た「検証」ではなかったか。中日新聞はないかと思う。編集部門を中心に、「組織」としてのリスク管理の検証の仕方が弱いと感じた。地方勤務全体として、どれだけ危機感があるのかが疑われる。

真摯に反省　鋭い報道を

「新貧乏物語」は、原発報道などの「特報」とともに、愛読してきた貴重な調査報道だ。真摯に反省しつつ、これからも読者を裏切らないで、中日らしい鋭い報道を続けてほしい。

なお本書最後で、「新貧乏物語」の新聞掲載をめぐっては、第4章「子どもたちのSOS」の記事と写真で事実と異なる不正が見つかり、中日新聞はこれら二本を削除するとともに、紙面で謝罪しました、と書かれている。これについては中日新聞「発言」に投稿して、2016年11月16日レポートでも紹介している。本書を読んで、私の「発言」も思い出した。

（2018年7月13日）